



幸福の選択

佐江衆一

幸福の選択

佐江衆一

江苏工业学院图书馆
藏书章



幸福こうふくの選せん択たく



発行——一九九七年八月三〇日

著者——佐江衆一さえしゅういち

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

162-8711 東京都新宿区矢来町七一

電話——編集部(03)三二六六—五四一一
読者係(03)三二六六—五一一一

振替——〇〇—一四〇—五—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

© Shuichi Sae 1997. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示しております。

ISBN4-10-309011-1 C0093

幸福の選択 ● 目次

序章 還暦の晩餐 7

第一章 一九四五年・焼け跡 20

第二章 東京見物 93

第三章 青春の標的 133

第四章 ハッピーさん 229

第五章 消えた男

285

第六章 岐路

343

第七章 いのちの樹々

402

第八章 きれいな夕陽

440

終章 小さな人間

483

装画 熊谷 守一
装幀 新潮社装幀室

幸福の選択

序章 還暦の晩餐

二月の黄昏のひかりが、浴室の高窓の化粧ガラスにまだ明るく射していた。西風に揺れる数本の鈴竹の影が映っている。

浴槽に身をしずめ、あごまで湯につかり、くつろいだ気分で、胸から腹へといったわるようになでみる。^{たなこころ}「掌に手術の痕がわずかに触れ、肥満みだが、七年前に手術をした胃の調子も悪くはない。この冬は、風邪ひとつひいていないのである。キッチンとダイニングルームのほうから、祝いの夕食の仕度をしている妻と息子と娘たちの弾んだ笑い声がきこえてくる。」

「還暦、か」

小さく声に出して、津村昭二はつばやいてみる。^{よここころ}よくぞ生きてきたと思う一方、これまでの六十年の人生が長くもあり短くもあり、あつけなかったような気もする。

平成五年二月十一日、建国記念の日、昭和八年生まれの津村昭二は、満六十歳の誕生日を迎えた。むかしなら還暦といえは老人だが、今日では初老ではあっても、暦が還える歳ではないだろう。しかし、歳だなど思う月並みな感慨が、立ちのぼる湯気のようにゆらいでいる。去年の秋ごろから急に身体の芯の力がぬけたような寂寥感におりおり襲われるのは、今月末に迎える定年の

せいだと、昭二にはわかつてゐる。

三十一歳のときスカウトされて入社し、二十九年間勤めてきた広告会社の定年の覚悟は、数年前から自分なりにしてきたつもりなのに、いざ目前に迫つてみると、残り少なくなる日を数えて、荒野にほうりだされるような不安に襲われ、夜中に目覚めたこともある。

(なアに、人生はこれからさ)

いまも津村昭二は胸のうちでつぶやき、うなじを浴槽のへりにもたせて、黄昏のひかりが揺れる高窓を見あげた。

第二の人生——という言葉はあまり好きではないが、夢はある。去年の秋から会社の同僚や後輩たちには内緒で、月に二回、木曜日の夜、カルチャーセンターにかよいはじめたのもその一つである。この浴室も改造したいなと思う。長男の宏が小学生になり長女の久美が三歳のときに、増築して子ども部屋をつくり、その後すっかり建て替えたけれども、割りときどき大きな琺瑯引きの浴槽だけは気に入っていて、最初に小さな家を建てたときからのものを三十一年も使っている。二人の子どもたちが幼かったころ、たまの休日に一緒にこの浴槽に入つたものだ。

(あのころは、若かったな……)

まだヨチヨチ歩きの、ころつと肥つた久美を抱いて膝にのせ、四つ歳上の、いたずらざかりの宏と父子三人、肌を触れあつて湯槽にひたり、水鉄砲がわりの両手をまるく結んだ隙間から湯をかけあったり、足先の霜やけと火傷の痕をさわらせたりしながら、戦争中の学童疎開のときの話や戦後に被災孤児だったころの話をしてやつたものだ。

(あれは、一九七〇年の大阪万博のころだったろうか……)

その浴室での光景が、はるか以前に見てすっかり忘れていた夢のように、昭二の脳裏に浮かんでくる。幼い子どもたちのはしゃぎ声もきこえてきて、鼻の奥がツンとするほどに懐かしい。

「あなた。いつまでもお風呂のなかで騒いでいたら、久美ちゃんのがほせてしまうじゃないの」浴室のガラス戸が開いて、湯上がりタオルを持った妻の佑子が笑いかけながらいったものだ。

「いま上がるさ」

そう答えて、

「宏、二十数えたら上がっていいぞ」

「パパ、十でいいでしょう？」

「だめだめ、二十だよ。さあ、久美ちゃんもね」

宏が大きな声で数えはじめる。昭二も声をそろえて数え、久美がよくまわらぬ舌で口まねをする……。

（しかし、あのころだったのだ、妻との離婚を考えたのは……）

いまとなれば、なぜあれほど幸せだった家庭を壊そうとしたのか。子どもたちが幼かったあのころが人生でいちばんよかったのにと、昭二は思う。その浴槽は珪瑯がところどころ剥げ、浴室の壁や床のタイルはひびが入ったり黒ずんだりしている。

（こんど改造するときは、ゆったり脚がのぼせる浴槽がいいな）

窓もひくくして、透明ガラスにし、外の鈴竹をのんびり眺められたらいい。定年になれば、昼間でも好きなときに温泉気分で入れるのだ。

高窓の夕陽はかげり、薄暗くなった浴室で昭二がそんなことを考えていると、洗面所と脱衣場が兼用になっている隣室のドアの開く音がして、妻の声がした。

「あなた、まだ入ってるんですか。夕食の用意ができたわよ」

「わかった。すぐに出る」

昭二は脱衣場に出て、下着をつけ、大島の着物を着、洗面所の鏡に顔をちかづけて、すっかり

薄くなった半ば白髪の髪をきちんとかし、口もとに深く刻まれたしわを氣にしてから、舞台に登場する役者のような氣分もちよびりしながら咳払いをひとつして、ダイニングルームへ出て行った。新しいティーブルクロスをかけた大きめなティーブルに料理がならび、サイドティーブルの花瓶に赤と白のバラの花が活けられている。そのバラの花束は、宏と悦子のプレゼントである。大卒一年のとき何が氣に入らなかつたのかこの家を出て、四年前から横浜に小さなマンションを借りて悦子と同棲している宏は、花束を悦子にかかえさせて、一時間ほど前に訪ねてきたのだった。その宏も、もう三十歳である。

「パパ、ここに座つてよ」

宏が上座の椅子をすこし引いていった。椅子が二脚ずつ向い合わせに並び、一脚だけ上座に据えてある。宏が家にいたころは家族四人が向いあつて座り、家を出てから一つ空席ができたが、それぞれに自分の席が決まつていて、昭二の父親の席も変わらなかつた。今日は特別である。昭二が席につくと、娘の久美がバースデイケーキを運んできて、前に置いた。

「すごいね。ロウソクだらけじゃないか」

「これでも半分の三十本にへらしたのよ」

色とりどりの小さなロウソクが、ケーキの表面が見えないほどに立っている。

「でもよく見て。パパのことがちゃんと書いてあるのよ」

なるほど、ケーキの表面にチヨコレートの文字が描かれている。

——パパ、おめでとう。祝還暦——

久美と悦子が二人がかりでロウソクに火をつけた。

「明りを消したほうがいいわね」

妻の佑子が灯っていた電灯のスイッチを切った。かすかにゆらめく三十本のロウソクの灯に、

テーブルをかこむ家族四人と悦子の笑顔、きれいに盛りつけた料理やシャンパン・グラスやバラの花束が浮かびあがる。

「ハッピーバースデー トウ ユウ

ハッピーバースデー デイア パパ……

娘の久美が音頭をとって、四人が声をそろえて歌いはじめる。

「おいおい、照れくさいよ」

「いいじゃないの」

「若くはないんだ。六十だよ」

「赤いちゃんちゃんこを着せられて祝ってもらうより、このほうが若々しくていいでしょう」
佑子にいわれ、昭二は湯上がりの上氣した顔をいつそう赤くして、四人の歌声をきいた。

「パパ、ロウソクを吹き消しなよ」

宏にうながされて、昭二は息を深く吸い込み、ロウソクの灯を吹き消した。三十本もあるから、一度では消せなかった。一瞬の闇がきた。明りがつき、そのまぶしい光のなかで拍手をする家族の笑顔が昭二にむけられる。胸に熱いものがあふれている。ちかごろは涙もろくなってもいるのだ。

「パパ、還暦のスピーチをどうぞ」

と久美がいった。

「あとにさせてくれよ。まず、乾杯しよう」

とてもスピーチどころではない。

「そうね。乾杯しましょう」

妻の佑子が助け舟を出した。

「悦ちゃん、シャンパンを抜けよ」

宏がちよつと命令口調でいう。

「宏君が抜いたほうがいいわよ」

悦子はシャンパンの瓶を宏に手渡した。

悦子は宏より三つ歳下で、二十七になる。宏の大学の後輩で、在学中に二人は窓に落ちたらしいが、いまだにおたがいを「宏君」「悦ちゃん」と甘えるように呼びあつていて、結婚してからもうそう呼びあうのだらうかと、昭二はくすぐったい気分ですつてしまう。二人が結婚していれば、昭二夫婦に孫がいていいのである。

宏が景氣のよい音をさせてシャンパンの栓を抜き、あふれた液をまず昭二のグラスに注ぎ、それぞれグラスをみたした。

「乾杯！」

五人のグラスがなごやかに触れあう。

「こうして祝ってもらつて、とてもうれしいよ。悦子さんも今日はありがとう」

そういつたが、やはりあとの言葉が胸につかえてうまくいえない。

「料理を食べながら大いに飲んで、楽しく騒ごうじゃないか」

ビールもワインも日本酒もある。悦子も手伝つてつくつた妻と娘の手料理は、昭二が好きな刺身やエビフライや野菜の煮物などで、尾頭つきのタイの塩焼きも豪華に和洋折中である。座はいつそうなごみ、談笑しながら旺盛な食欲をしめす一同を、久美がスナップ写真におさめた。

「パパ、三月からどうするの？」

宏がワインをつぎながらたずね、久美も悦子も身を乗り出すように昭二を見た。妻の佑子以外にはまだだれにも、定年後どうするかを話していいないのである。

「しばらく、のんびりするつもりだよ」

昭二はまずそういつてから、

「なにしろパパは、高校を卒業したときから実社会に出て、四十年以上もサラリーマンをしてきたから、定年を機会にすこし休みたいね。別の会社でこないかという話もあったけど、断ったんだよ。まあ、半年か一年、インターバルをとって、今後のことをじっくり考えようと思うんだ。

苦労ばかりかけてきたから、ママにも骨休みしてもらいたいしね」

「二人で海外旅行でも行ってきたら？」

と久美がいい、

「そうなさったら、ねえ、お母さま」

と悦子もいった。

「ええ、ありがとう。でもわたし、英語はサンキューぐらいしかいえないのよ」

佑子がそういつて首をすくめたので、一同の笑いをさそった。これまで昭二は会社の出張で海外へは幾度も行っているし、戦死した兄の戦跡をたずねて一人でフィリピン旅行もしているが、妻をハワイにさえ連れて行っていない。二、三週間のツアリに入つて、ヨーロッパかアメリカに連れて行つてやりたい。還暦と定年記念の夫婦の海外旅行。妻の佑子は六歳若いから五十四で、まだこれからである。

「ところで、宏。悦子さんと結婚はどうするんだい？」

昭二は、ずっと気になっていたことをたずねた。だれよりも心配しているのは妻の佑子で、今日は宏と悦子にはつきりきくよい機会である。

宏は、一年遅れて大学の経済学部を出て建設会社就職したのに、二年前の春、突然に退職してしまい、アルバイトをしながら以前から好きだった絵を描いて、やはり絵の好きな悦子と同棲

生活をしている。悦子は雑誌のイラストを描いたり、花屋のアルバイトをしたり、フリーターである。昭二夫婦は若い二人のライフスタイルを理解しているわけではない。男女がひとつ屋根の下で暮らす以上は、正式に結婚すべきだと、昭二も佑子も思っている。

宏はホコ先が自分にむいたののに、笑いしながら、悦子と顔を見あわせ、

「いいんだよ、いまのままで。ねえ、悦ちゃん」といった。

「でもね、悦子さんのご両親はどうお考えなのかしら？」

佑子が母親の立場でたずねた。昭二にしても、娘の久美が悦子のようになった場合、父親としては許せない。息子の父親だから男として多少のんびり構えているところがあるが、これが娘の父親だったら苛立ちがつのり、とても平静ではいられないだろう。

「悦子さんの金沢のご両親は、正式に結婚してほしいと、お考えじゃないんですか？」

昭二も妻の言葉をひきとつて、あらたまった口調で悦子にたずねた。

「ええ、母は心配しているようですけど、父はなにもいいませんから」

「宏の父親として、私からご両親にきちんとご挨拶しなくてはいけないとは思っているんですが……」

「いいんです、そんなことなさらなくて。ねえ、宏君」

「うん。これは僕たちのことなんだ。僕も悦ちゃんもいまのままがいちばんいいと思っているんだから、それでいいじゃあないか」

「でもね、宏……」

「ママ、心配しないでよ。僕たち、子どもじゃないんだし」

そういうわれると、この席では昭二も黙らざるをえない。